

認知症があっても 慣れ親しんだ家で生活していきたい！

SITUATION.

現在の生活状況 について



鈴木 敏子さん（仮名）
78 歳

身体状況

要介護度 2
認知症
難聴

家族状況

息子と 2 人暮らし
隣町に住む娘が、
週 1～2 回手伝いに来る

福祉サービス利用状況

訪問介護：週 7 回
午前・午後各 1 時間

住まい・福祉用具の状況

棟続きの町営住宅
居室内は段差少なく、
歩行には問題なし

鈴木敏子さんは、数年前より認知症が進行し、介護保険制度の要介護度認定では要介護 2 の認定を受けています。

敏子さんは息子の修一さん（仮名）と二人暮らしですが、修一さんは仕事があるため日中は一人で過ごしています。隣町に住む娘の直子さん（仮名）が週に 1～2 回身のまわりの手伝いに来てくれます。

敏子さんは週 7 回の訪問介護を利用しています。ホームヘルパーが午前と午後訪問し、家事や着替え、入浴などの身のまわりの介助をしています。訪問介護を利用するまでは、毎日隣町から直さんが来て食事や身のまわりの介助をしていたので、訪問介護を利用することにより介護負担はかなり軽減されました。

身体状況は、腰が曲がっており姿勢はよくないですが、杖を使用せずに歩くことができます。近所くらいであれば、ゆっくり休み休み散歩できますが、長距離を歩くことは難しいです。また重度の難聴があり、かなり大きな声で話さないと伝わらないことが多くあります。補聴器も持っていますが、敏子さんがあまり好まず使用していません。

自分の名前や修一さんの名前はなんとか分かります。直子さんの名前や毎日来ているホームヘルパーは誰だか分からないようですが、自分の世話をしてくれる頼れる人という認識はあるようです。一人で近所に散歩にも出かけたりしますが、今のところ道に迷って家まで戻れないということはありません。

日常生活では、食事は用意すると自分で食べることはできますが、冷蔵庫に入っている調理前の下ごしらえの材料などをそのまま食べてしまったり、また調味料などもそのまま飲んでしまうことがあります。

排泄は自分でトイレに行きますが、間に合わないことも多くなり、また汚れた下着をそのままタンスにしまってしまうこともあり、徐々に心配なことが多くなってきてます。

入浴は、週に 1 回ホームヘルパーが介助して入っていますが、お風呂に入るのをとても嫌がるため、浴室まで連れて行くことや着替えをすることにとっても時間がかかっています。しかしいったん湯船につかればとても気持ちよさそうな表情をうかべています。

敏子さんは、以前から人付き合いがあまり得意ではなく、難聴で人の話がよく聞こえないのもあり、デイサービスの利用はしていません。

家族は、敏子さんの安全を確保し、できるだけ長く在宅で生活ができるようにしたいと願っていますが、今後の生活に不安を感じています。



ADVICE. 専門家からの 助言

安心して生活していくための 様々な方法や工夫を考えてみましょう。

1 排泄の状況を確認し、対応を検討しましょう。

敏子さんは一人でトイレには行けますが、間に合わないことがあるようです。まずはトイレに行く時間や回数と水分摂取状況を確認し、決まった時間に声をかけトイレに誘導する等、保健師やホームヘルパーと対応を検討しましょう。また、オムツや尿取りパットではなく、介護用下着の着用も考えてみましょう。

2 安全に生活するために、生活環境を整えましょう。

認知症の進行に伴い、冷蔵庫に入っている調理以前の食材を食べたり、釜のご飯を全部食べてしまったりと、味覚や満腹中枢も鈍っている傾向があり、他の感覚神経も今後鈍る可能性が考えられます。食品の管理、洗剤等の危険な物は手の届かない所に置くようにしましょう。

また、日中は修一さんが仕事に行くと敏子さん一人で過ごすことになるので、冬期間ストーブを使用する際に囲いをし、またストーブを FF 方式にしてみる等、今後を見据えた安全な環境作りを考えましょう。

3 認知症と症状の理解を深めましょう。

認知症の症状により、入浴や衣類の着脱介助を嫌がるなど介護を受け付けない場面があるようです。家族の方が認知症の方への理解を深めるとともに、コミュニケーションのとり方を習得できるよう支援を考えましょう。

また担当するホームヘルパーにより対応に相違がないように、対応の仕方や方針を決めて、みんなで確認しておくことが大切です。

4 人とのかかわりと地域での見守り体制を広げておきましょう。

敏子さんは難聴もあることから、人付き合いがあまり得意でなく、デイサービスも利用していません。今後のことを考えて、家庭的な雰囲気の中で他人とも馴染んでいけるような小規模デイサービスの利用等から支援を考えていきましょう。

また、認知症は進行していく病気です。自分の家への道など熟知しているはずの場所で迷い、行方不明になったりします。症状が進むにつれて、目的もなく長時間反復しているような歩行としか思えない行動がある場合もあります。今後、ご近所の方々に見守りをお願いするなど地域ぐるみの見守り活動を広げていくことも必要でしょう。